

赤谷プロジェクトにおける地域材の活用の取組 ～カスタネットづくりの取組～

関東森林管理局 静岡森林管理署 小向 愛

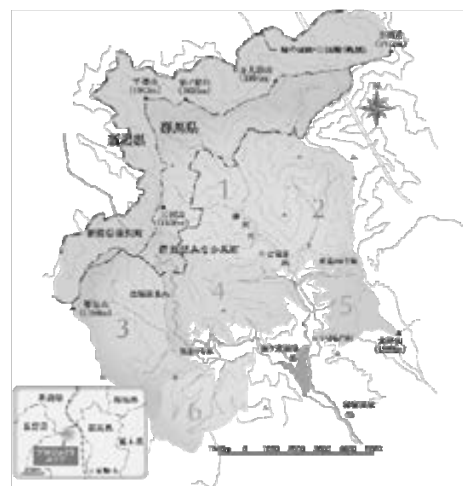
1 はじめに

赤谷プロジェクトとは、三国山地／赤谷川・生物多様性復元計画のことをさし、3つの基本理念があります。一つ目は、生物多様性を科学的な根拠をもって保全・復元すること。二つ目は、自然を損なわないように活用しながら地域づくりを進めること。三つ目が、関東森林管理局、日本自然保護協会及び赤谷プロジェクト地域協議会の三者が協働して取り組むことです。赤谷プロジェクトの活動方針は、三者とみなかみ町が参加する企画運営会議の中で話し合わせ、意思決定がされる仕組みになっています。赤谷プロジェクトが行われている赤谷の森は、群馬県みなかみ町北部の約1万ヘクタールの国有林であり、利根川の最上流部になります。

次に赤谷プロジェクトで行っている主な活動について紹介します。はじめに、クマタカやイヌワシなど赤谷の森に住む猛禽類などのモニタリングです。モニタリングを行うことによって、猛禽類などがどのように赤谷の森を利用しているかがわかるようになり、それに基づいて、赤谷の森を管理することができるようになります。次に、赤谷の自然を地域の人に知ってもらうために環境教育を行っています。例えば、地元の小・中学校へ毎年恒例の学校行事として森林教室などを行っております。また、生物多様性復元のための森林整備も行っております。スギなどの人工林を伐採し、広葉樹を主体とした自然林に復元するための取組を行っています。そして、地域の人が主体となった、赤谷の森の恵みを生かす活動を行っています。わたしが取り上げたいのは、この赤谷の森の恵みを生かす活動の中のカスタネットづくりの取組についてです。

2 課題を取り上げた背景

赤谷プロジェクトの3つの理念の一つである地域づくりを進めていく上で、広葉樹の活用が重要な課題であることは赤谷プロジェクトの中で認識されていましたが、赤谷の森の広葉樹材は有効に活用されず、地域づくりに活かしていない状況にありました。その要因のひとつは、赤谷の森で発生する広葉樹材は、公共事業で行う道路工事や送電線の安全確保の際に伐採されたものであり、発生するのが不定期で、多くは低質材であることが考えられました。また、材の種類もさまざまであ



上図：赤谷プロジェクトが行われている約1万ヘクタールの国有林＝赤谷の森



上写真：みなかみ町に昔からあるカスタネット工房とカスタネット職人の富澤さん

ることから、パルプ材や薪炭材へ利用されるか、林内で玉切りを行ったまま、存置されているという状況もあると考えられます。そうして、こうした広葉樹材をもっと地域づくりに活かしたいと考えました。

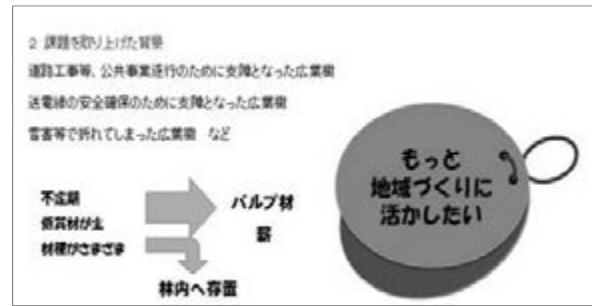
一方で、赤谷の森があるみなかみ町には、広葉樹材の活用の担い手としてカスタネット職人が在住しており、昔からカスタネットづくりが盛んでした。実は、みなかみ町は赤と青に塗り分けられた教育用カスタネットの発祥の地であり、このカスタネットを考案した人こそがみなかみ町に住んでいたカスタネット職人なのです。考案されたカスタネットは、手軽にたたいて音が出るよう口が開いた状態でゴム紐によって固定されており、それが現代のカスタネットの原型になりました。また、このカスタネットは、日本全国の学校に普及し、最盛期には年間 200 万個がみなかみ町で作られていました。

その頃の時代背景としては、戦後のベビーブームや、生徒が一人一つずつカスタネットを持っていたという需要の面と、拡大造林により、ブナなどの広葉樹材が市場に多く出回っていたという供給の面が、カスタネット生産を支えていたと考えられます。

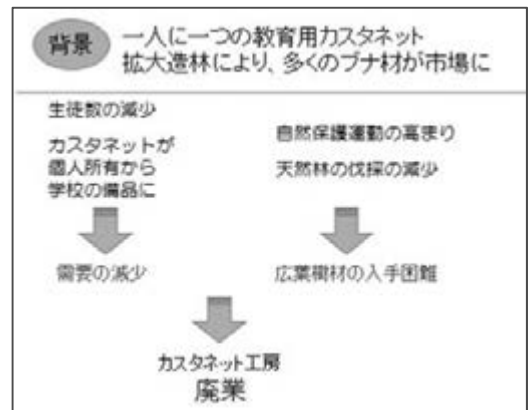
しかし、約 200 万個のカスタネットを生産していた時代とは状況がだんだん変わっていきました。まず、少子化によって生徒数が減少したり、カスタネットが個人所有から学校の備品になったり、需要の減少が見られるようになりました。次に、自然保護運動の高まりによって、天然林の伐採自体が減少し、国産の広葉樹材を手に入れることが難しくなりました。これらの理由から、みなかみ町のカスタネット工場は廃業となりました。廃業となった後も、地域の広葉樹材を有効活用したいという赤谷プロジェクトの思いと昔ながらのカスタネットを望む地域の声は変わらずにありました。

3 取り組んだこと

赤谷プロジェクトのメンバーは、みなかみ町のカスタネット職人である富澤さんに「なんとかもう一度カスタネットをつくってほしい。それも輸入材ではなく、地元の木でつくってほしい」と、熱心に頼み込みました。もともと赤谷プロジェクトの活動や取組に対する富澤さんの理解があったことから、赤谷プロジェクトの熱意が通じて、廃業してから1年後に、カスタネット工房と名前を新しくし、みなかみ町でのカスタネットづくりが再開しました。再開したカスタネットは、赤と青の塗装をやめて、木目の特徴や木の温かみがよくわかるデザインに一新されました。そして、再開した年の4月には、地元の新治小学校の新入生全員に、新しいデザインのカスタネットをプレゼントすることができました。こうして、みなかみ町の地域産業であるカスタネットづくりが復活し、富澤さんの作るカスタネットを子供たちに触れて親しんでもらうことができるようになりました。これは一つの例ですが、赤谷の森から発生した広葉樹材の有効活用として、三国トンネルの工事の際に伐採された広葉樹材を富澤さんが作るカスタネットに活用してもらうことができました。普段



上図：課題を取り上げた背景①



上図：課題を取り上げた背景②

は一般材として扱われないような材質のものを有効活用することによって、国有林の広葉樹材の利用をすすめるきっかけをつくることは可能であると考えます。こうした取組で必要なのは、関係者が広葉樹材の有効活用を考え、地元致富澤さんのような広葉樹材を有効活用してくださる方がいることを認識していることだと考えます。

社会情勢の変化により減少していたカスタネットの需要は、赤谷プロジェクトやみなかみ町が全面的にバックアップしたことにより、地域の中で少しずつ需要を復活させることができました。まず、2014年に地元の新治小学校にカスタネットをプレゼントしてから、その取組は始まり、2015年、2016年、2017年には、みなかみ町の全ての小学校の新入生約100人へプレゼントすることができました。また、ぐんまちゃんカスタネットの製造や楽天のノベルティへの起用など、赤谷プロジェクトの趣旨に賛同いただきご協力をいただいている企業との連携もすすめられており、これらの活動は引きつづき行われる予定です。みなかみ町においては、2016年に木育の推進活動のひとつであるウッドスタート宣言を行いました。ウッドスタート宣言とは、町内の新生児に木製玩具を誕生祝い品として贈呈する取組で、今後は、みなかみまちの友好都市である東京都中野区の新生児へのお祝い事業などにも使っていくことが予定されています。このように、みなかみまちのカスタネットに対する需要はこれからも継続していくことがうかがえます。



上写真：赤谷プロジェクトの働きかけにより、みなかみ町で生産を再開したカスタネット

4 今後の課題

2014年の再スタートから順調に進んでいるカスタネットづくりですが、一方で材料の調達についての課題があります。一つ目は、公共事業の工事などから発生する広葉樹材を有効活用するとしても、若くて細い木だったり、伐倒してから林内に存置されていたりして、材の色が悪いものが多く、ウッドスタート事業に使われるような贈答品には向かないため、品質の確保が求められています。そのような品質を確保するためには、50 cm以上の大径材が必要になります。二つ目は、広葉樹材の発生する時期が不定期であるため、安定的に材料を入手しにくいことです。現時点ではカスタネット工房にあるストックでまかなうことができますが、今後は、需要の拡大により、カスタネットの生産量は増えることが見込まれ、いずれは材料が足りなくなることが予想されます。このようなことから、不定期に発生する広葉樹材を活用するだけでなく、赤谷の森から、カスタネットづくりに適した広葉樹材を継続的に活用する方法を考察しました。



上写真：ウッドスタート宣言により、誕生祝い品として町内の新生児に贈呈される木製玩具

赤谷プロジェクトの基本理念に立ち返ってみたときに、赤谷プロジェクトとして、科学的根拠に基づいた生物多様性の保全と両立する森林施業を提案することが必要であると考え、広葉樹を伐採することによる影響評価を行うために、様々なモニタリング調査が継続して行われている場所が適していることから、取組として可能な場所は、茂倉沢エリアであると判断しました。茂倉沢エリアは、昨年、猛禽類であるクマタカを指標とした森林施業のあり方が提言されています。また、重倉沢林道から30mまでの範囲においては、立木を伐採したとしても、クマタカの生息活動に大きな影響を与えないことが推

測されているだけでなく、林道沿いで狩りなどを行うクマタカにとって、生息環境を改善することができると示唆されています。

今後の展望としては、茂倉沢エリアの林道沿いに生育する広葉樹の蓄積を調査し、蓄積から判断される、循環利用が可能な伐採量の検討を行い、試験的な伐採をして、循環利用が可能であることの検証ができれば、広葉樹を地域で有効活用するための施業モデルを構築することができるようになると思います。こうした取組と検証を継続することで、生物多様性の保全に配慮しつつ、国有林の広葉樹材を地域の産業に活用することが可能になると考えます。



上図：クマタカを指標とした森林施業のあり方が提言されている茂倉沢エリア。広葉樹の単木的な利用が期待されるエリア。